Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

地域歴史遺産の保全と海港都市神戸

奥村, 弘

(Citation)
海港都市研究,創刊:33-42

(Issue Date)
2006-03-24

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/80030005

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/80030005

KOBE UNIVERSITY

地域歴史遺産の保全と海港都市神戸

奥村　弘
(OKUMURA Hiroshi)

はじめに　－地域歴史遺産という考え方の浸透－

阪神淡路大震災が発生した1995年ごろから、日本社会において、国や自治体が指定する重要文化財や自治体指定の文化財とことなる位置づけをもった地域文化遺産もしくは地域歴史遺産という概念が広まり始めた。

たとえば、内閣府の「災害から文化遺産と地域をまもる検討委員会」は、2004年７月「地震災害から文化遺産と地域をまもる対策のあり方」を取りまとめた。ここでは、文化遺産について、「文化遺産は法律で規定されている文化財だけでなく、広い意味で歴史的な景観やまちなみ等空間的なものを含めるものとする。文化遺産と地域をあわせてまもるという考え方においては、地域の核として認識されている文化遺産であれば、それは世界遺産、国宝などに限定する必要はないと考えられる。そこで、本あり方において対象とする文化遺産は、世界遺産、国宝、重要文化財等の指定されたものだけでなく、未指定の文化遺産も含め地域の核となるようなものとする。」と述べた。

地域文化遺産とは、その地域の記憶をその地域において次の世代に引き継ぐ、地域にとってかけがえのないものであると明確に考えられている。たとえば100戸程度からなる地域自治会の記録は、日本全国どこにいっても存在するものである。しかし、そこに記録された地域の出来事は、その記録にしか残されていない。その地域にとっては、他のものと代え難いものであり、これらが全体として地域の文化遺産となっていくのである。

地域歴史遺産という考え方が、日本の歴史学界で体系的に述べられるようになるのは、日本の様々な歴史学会が、歴史資料ネットワーク（略称、史料ネット）を作り、阪神淡路大震災後の歴史資料の保全活動をすすめて以降のことであった。地域歴史遺産は、その地域の歴史的な形成過程と密接にからみあっている。したがって、大震災被災地である港湾都市神戸では、神戸市民の歴史意識のあり方が、活動の中で浮かび上がることとなった。

本稿では、第一に史料ネットの活動に即して具体的に現れた日本社会の歴史意識のあり方を考察し、第二に海港都市神戸におけるその特質について考えたい。

第１章　阪神淡路大震災後の歴史資料保全活動と歴史資料ネットワークの活動

歴史資料ネットワークは、現在以下の６点を、活動の目的としている。①阪神淡路大震災後の保全歴史資料の保存と活用、②阪神淡路大震災の資料・記録の保存と活用、③被災地を中心とする市民の歴史研究活動の援助、④大規模自然災害についての史料保全・歴史研究についての提言、⑤大規模自然災害の際の歴史学会の史料保全活動の暫定的なセンター的役割、⑥市民社会の中での歴史資料のあり方の研究。

またその活動は、大まかにいって、以下の５つの時期にわかれる。

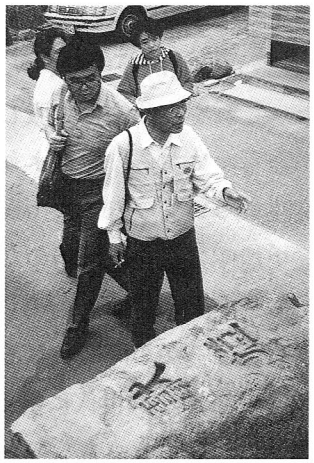
第１期	1995年２月～４月	歴史資料保全情報ネットワークの成立
第２期	1995年４月～1996年３月	巡回調査、市民講座、震災資料への取り組み等開始
第３期	1996年４月～2002年５月	歴史資料ネットワークと改称、目的活動の明確化
第４期	2002年５月～2004年６月	市民と歴史学会による組織として、目的活動のいっそうの明確化　個人会員、サポーター制導入
第５期	2004年６月～現在	大規模水害時の保全活動開始、事務局長等の中心メンバーの世代交代

第１期は、マスコミ等を通しての市民へ歴史資料保全を呼びかけ、文化庁の関係団体・自治体等による情報提供を受け、被災した家屋から歴史資料を保全する活動が基本になった。95年２月から96年12月まで39件の史料保全が行われ、参加者はのべ466名におよんだ。これにより民具類を除き、段ボールで1500箱を超える史料が保全された。

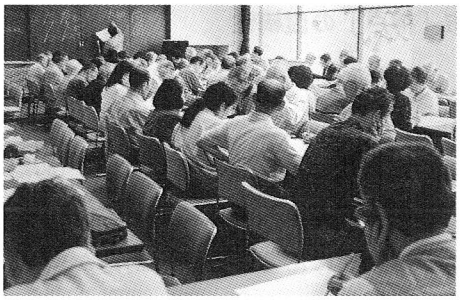
史料ネットは、地域の歴史を語るものをすべてを価値ある歴史遺産と考えて保全を進めることを当初から原則とした。これは、特定の価値を持つ歴史遺産を対象として、その保存をすすめるというこれまでの歴史研究者の文化財保存運動とことなる史料ネットの歴史資料保全活動の基本的特質であり、基本的な考え方は今も変わっていない。個人の写真やビラも地域の歴史を語る史料であり、これを保全していくという呼びかけは、地域の歴史資料とは具体的にいかなるものなのか、どのように震災以降も保全するのか、さらには指定文化財と地域の歴史資料とはいかなる関係にあるのかという問題にぶつかった。第２期以降は、被災地をまわる巡回調査や被災地の人々を励ます市民講座など、この問題への対応のなかで展開していくのであるが、これについては、当日具体的に述べてみたい。



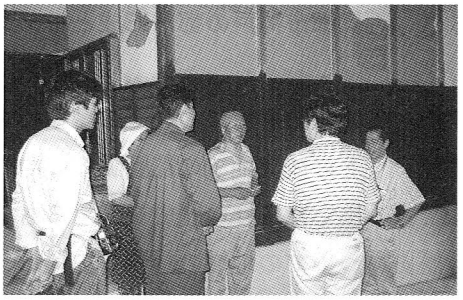
1　大震災後の被災地倒壊家屋での歴史資料保全活動
　震災後の余震の中、倒壊家屋での活動には危険があった。



2　大震災時の歴史資料ネットワークの巡回調査活動
　大学院生や若手研究者と地元の歴史家が共同して調査を行った。



3　大震災時保全史料による市民向の古文書講座
　宝塚市での市民講座は、のち市民の自主的な古文書サークルへと展開した。



4　宮城県北部連続地震時の被災地調査
　大震災後、地震や水害時の被災歴史資料保全の動きが全国に拡大した。

第２章　歴史資料ネットワークの活動の特質と現代日本社会の歴史意識

史料ネットの活動は、以下のような特質を持つ。

(1)　多くの人命が失われ、厳しい生活が続く被災地で、歴史文化に関わるものが何ができるのかという問いへの一つの対応。ここでは、地震災害から歴史資料を保全することが、地域に生きる人々の歴史を未来に伝えることになるという歴史文化のあり方を展開した。

(2)　組織論、これまで経験のない活動であり、どのようにするのか、どこまでできるかは全く想定できない状況ではじまる。これまでに蓄積されてきた様々な歴史遺産の保存活用の動きの蓄積のあり方が試される。最近の日本の歴史学が、地域社会と直接向き合う点での弱さを持つことと、それゆえの地域社会の豊かな歴史文化を再「発見」する。

(3) 現代日本社会の歴史意識を現場から考え、それを共有化しようとする試みであった。

震災後、厳しい状況の中で、私たちの訴えが受け入れられるかどうかについての迷いがあった。これを実践的に克服していく。地域から期待される活動であったことが実践の中であきらかになる。史料ネットの地震の際における組織化の原点。

(4) 歴史文化についての日本の市民社会の基礎的力量の高まりと課題

①地域歴史遺産の保全、活用のなかでの新たな市民の歴史意識への接近

研究者が叙述したものを読むものとしての市民、 歴史像の受け手としての市民というあり方をどう越えるかが問題となる。

②災害の記憶をどう次世代に伝えていくのか、 市民の歴史文化に対する力量増大に対応する専門性はどうあるべきなのか。 大震災資料の保存と活用の問題として展開する。

③人文社会科学の中での歴史的アプローチと共有認識の弱まり、一次史料に直接ふれない社会科学の動向が、史料保存を困難にする。

第3章 近代都市神戸の都市形成とモダンな都市「神戸」の虚構性

第1節 地域歴史遺産についての認識のズレ

史料ネットの被災地での巡回調査の中で、地域歴史遺産とは、被災地で市民が日常生活の中で作り出した様々な歴史を伝えるものであるという研究者の認識に対して、市民の側は、歴史についての地域の重要な史料は、市役所や博物館にある、という対応が少なからずあった。さらに神戸市では、神戸はモダンな街であり、近代以前の歴史はないという考え方が出された。

神戸の「モダン」なイメージは、現在ますます強まっている。たとえば「モダンな都市神戸」を象徴する神戸まつり。このまつりは、京都の祇園祭と大阪の天神祭という伝統的な祭に挟まれることによって、伝統的なまつりとの違い、さらには歴史の古い両都市と神戸とのちがいが強調されることになった。

この神戸まつりは、第二次世界大戦以前からある、みなとの祭り（1947年復活）を廃止し、1967)年からはじまった神戸開港百年祭の神戸カーニバルを吸収し、1971年に「神戸まつり」として成立したものである。この神戸まつりは、その開催の方法をめぐって問題がおこるが、そのあり方を討議した委員会には、モダンな都市神戸という考え方が明確に打ち出されていた。それは以下のようなものある。

（今井鎮雄委員長）比較的歴史の浅い神戸を、早く私たちの町神戸にしていきたいという願いはみんながもっているものだと思います。

（「神戸まつり検討委員会第一回総会議事録」『「神戸まつりのあり方及び昭和52年以降における神戸まつり」に関する答申書』1976 年、P55）

（岩井直臣委員）方向としては将来神戸まつりは日本中に誇れるようなまつりにしていく、伝統の浅い神戸ですけれども、・・・

（同、P84）

伝統文化を持たない開かれた街という性格が100年都市神戸の特色であるとすれば、そういう街を舞台とした神戸まつりは、例えば京都の葵祭りのような伝統的文化と風土に支えられた祭りと本質的に異なるものであることを、はっきり認識すべきである。

（同、P103）

しかしこの地域は近代に入り、突然開けた場所ではなかった。福原京など、古代以来港湾機能を持つ地域であり、中世以降も兵庫津という瀬戸内海で最大規模の港湾都市があった。さらによく知られたところを拾い上げると、近世最大の酒造地域である灘や、中世以降著名な有馬温泉なども神戸市域にある。

ところが、そのような多彩な歴史は、現在の神戸市の都市イメージには組み込まれていない。イメージどころか、その基礎となる事実、たとえば灘五郷の中核が神戸市内にあることを知っているものは驚くほど少ない。1996年度の神戸大学文学部の一回生に質問した際、このことを知っていたものはわずか三割であった。

都市イメージ、それをどう描いていくかは、人々がどのような都市をつくろうとするのか、それを考える基礎をなす。また一度、都市イメージが描かれ、それが固定化すると、そのイメージと都市の現実とが大きく食い違い、あらたな都市創造を困難にするということもおこる。大震災後の復旧・復興過程でおこった行政と住民の間や、被災地の内と外での対立や摩擦は、一面では復興についてのことなる都市イメージのぶつかりあいでもあった。第３章では、この神戸のモダンなイメージの形成され方を明らかにする。

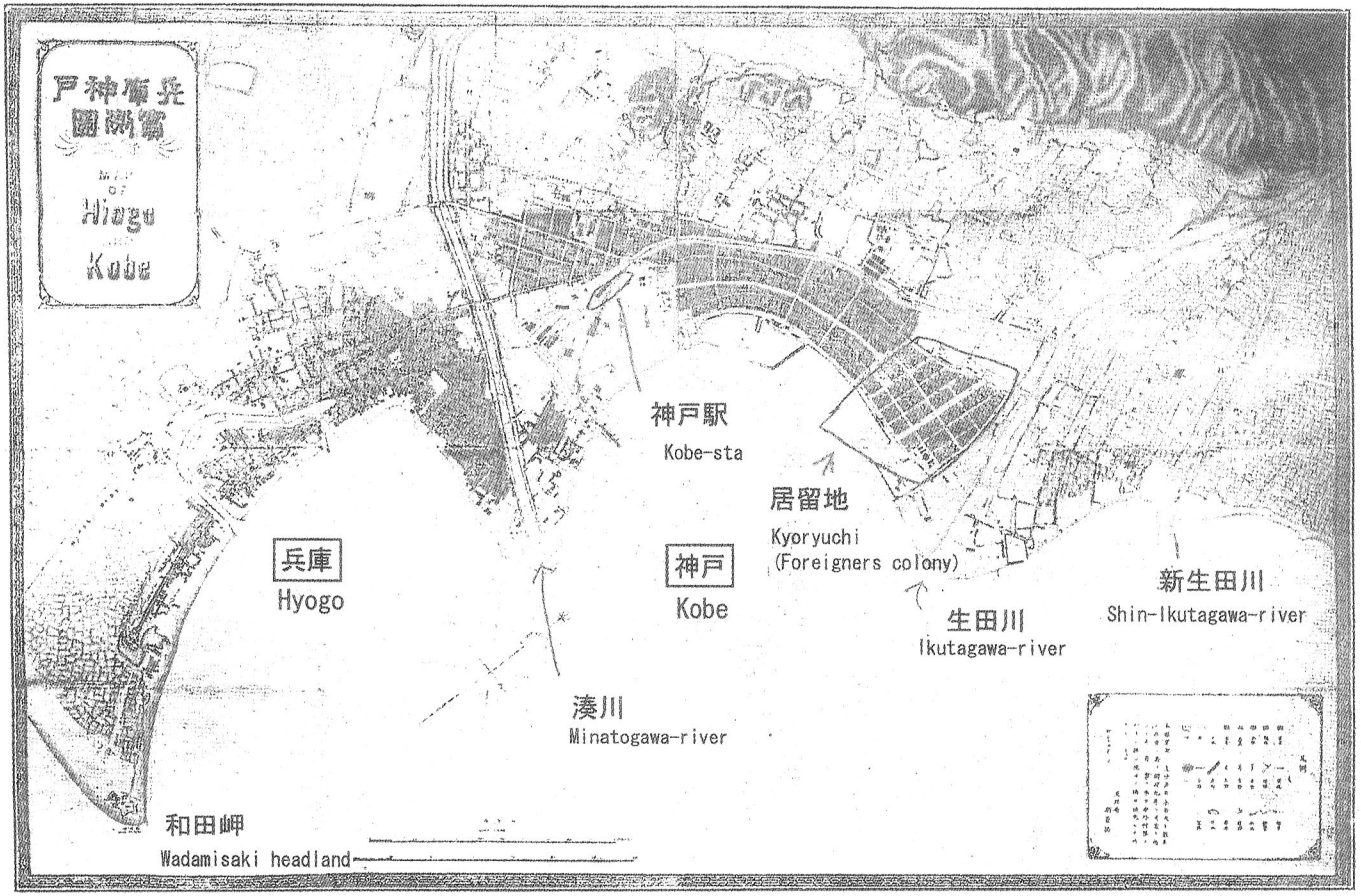
第２節　神戸の都市イメージの変遷

神戸の都市イメージは大まかに見て以下のように変化する。

(1)　1900年代までの「兵神」という見方

1889年に近世以来の兵庫と開港場を中心とした神戸地区（図参照）を含みこんで、神戸市が成立する。その人口は、おおよそ13万人であった。神戸市ができても、おおよそ1900年ごろまでは、この兵庫と神戸両者を含む地域が、「兵神」という形で把握されていた。

第八圖



明治十四年神戸區地圖（神戸市役所藏）

原圖は地理局が明治九年三月實測に著手し、十年二月完了、十四年二月印行せしもの。十二年一月郡區町村編制法施行により兵庫神戸の二區合して神戸區となる。本圖は併合以前遠からざる時代の狀況を知るべきもの。

この時期には、まだモダンな都市神戸という単一化されたイメージはない。

当時神戸の代表的な新聞であった。『神戸又新日報』は次のように述べる。「吾輩は兵庫商人が全く因循たれ、引込思案たれと云ふにあらず、文明の新事業に従はん事を希望する者なれ共、飽までの其歴史を守り、其性質に背かず、偏に着実の風を失はずして、一家一門の繁栄富貴を期せん事を望むに外ならず」「兵庫商人」(『神戸又新日報』1892.10.13)。ここでは、開港場である「神戸」は進取の地域であり、江戸時代以来の「兵庫」は、旧守の地域と認識されながらも、ことなる質をもつ二つの地域の結合体として把握されていたのである。

このような認識は、1901年に神戸地区と兵庫地区を両者を隔てる湊川が付け替えられ、市街地が一体化しても変わらなかった。たとえば神戸又新日報は、「兵庫が古き歴史を有するに拘らず神戸は三十年前迄は、芦葭繁茂せる一漁村に過ぎざりき、然るに三十年後の今日は物質的勢力に於て精神的勢力に於て神戸は較もすれば兵庫の上に一頭地を抽んとする傾向あり、両者が斯の如く一転して将に其地歩を変易せんとするは天然の地勢が然らしむる所なりとは云へ、両者思想の活動の方面が相異れるも亦其一因たらずんばあらず」「神戸と兵庫の側面」(『神戸又新日報』1902.11.30/12.1) と述べ、神戸地区の地位の高まりにふれながらも、明確に両者を区別していたのである。

(2) 1920年代の転換

1925年には神戸市の人口は70万人を数えるにいたった。この時期の神戸市の発展について、当時市長であった桜井徳太郎は、この年出版された『神戸市史』の序文の中で次のように述べた。

> 抑も我神戸市の地たる歴史的港泊として往古より有名なる兵庫を其域内に包有するのみならす、福原遷都以下、国史上の大事件にして此地に関係を有するもの亦少しとせす、而して徳川時代の末期に及ひては此地外交問題の焦点となり、幾多の曲折の後慶応三年十二月七日遂に互市場として開港せられ、爾来年処を経ること五十年、其間発展の跡を顧るにひとえに刮目に値するのみにあらす、是に於て本市隆盛の由りて来る所を明にし以て市民百年の考鏡に資せん

ここでは、貿易の拡大の中での神戸市の発展は、神戸市が「国史」上の重要事項と関わり続ける場であることが重視されている。それは近代からはじまるものでなく、平清盛と福原京という古代以来の歴史のなかで語られているのである。

このような視点は、同年神戸市役所から、市民を啓発するものとして刊行された『神戸市民読本』では、いっそう明白である。ここでは「それからまた欧米の諸国では市民の愛

市心が、なかなか盛んあつて、どこの都市へ行つて見ましても、市民は皆自分の住宅や居室を愛するように自分の都市を愛し、その名所旧跡を誇り、道路、下水の整理、社会事業の成績のすぐれたことなどを誇ります」と、市民が自己の都市に対するアイデンティティを持つことの重要性を指摘した。

そして「日本は古い国である。建国以来三千年の長い歴史と伝統を持つている。しかし又新しい国でもある。明治維新以来、新しい生命に蘇生して、古い歴史には元気と活気とに満ちた新しい血潮が漲り、世界中の人を驚かせるほどの大活躍をなしとげた（中略）我が国維新以来の大発展は、全く三千年来のりっぱ歴史にもとづく、美しい国体によつて出来たのであつた。天皇は臣民を赤子の如く愛撫したまひ、臣民は天皇を御親のやうにお慕ひ申して、忠君愛国の道を励んで来た。されば我が国運は年々に発展し、文化は常に進歩して来た。その歴史は不断の改善の歴史であった。」と述べ、さらに神戸という場は、このような歴史が具体的に現れる場であると述べたのである。

この日本の不断に繰り返される自己革新による発展という「光栄ある歴史」と結びついた「古くて新しい都市」であるとして兵庫、神戸の二地区は、一体的な認識のもとに置かれるようになっていったのである。ただし、この見方に困難があった。かならず国史上の発展と結びつけねばならなくなると、天皇に対する反逆者の側面をもちながら、なおこの地域の国家的な港湾整備に深く関与した平清盛を組み込むことが難しかったからである。市民読本では、「平相国の不忠不義な点はどこまでも鼓を鳴らして責めなければならぬ。しかし、彼が先見の明に富み、勇断進取にしてあくまでも、積極的に物事をやり通すといふ点については大いに吾人の学ばなければならぬ処である。何と言つても平相国は我が神戸市の発展の歴史と切り離すことのできない大人物であった」との評価をおこなった。

(3) 1930年代の都市の発展と「歴史意識」の拡張

1931年９月１日、神戸市は複雑化する行政事務に対応するために行政区を設置し、区ごとの自治機能を拡大した。10月19日に市会は、それまで旧湊川の西という地理的な位置から名付けられていた湊西区の名称を、歴史的な由来に基づき兵庫区とすることを、市民からの建議を受けて可決した。ここに現れているように、1930年代、戦時色が深まるとともに、国家の歴史的な正統性と結びついた地域の正統性を主張する地域の動きが拡大していった。

1933年に第１回みなとの祭がひらかれた。この祭典は、『神戸市史第二輯』が「神祇の恩沢に報謝すると共に本市の繁栄を企圖するの観念を普及徹底せしむる目的を以て、新に神戸市及市内の官民有力者によりて設立せられたる神戸市民祭協会主体となり、毎年『みなとの祭』を挙行することとなり、昭和八年四月の交より準備に着手し、其第一回を一一月七・八の両日に互りて華々しく開催した。」と述べるように、太古以来続くとされる日

本の「歴史」なるものを、現在の都市の繁栄に意識的に結びつけようとしたものであった。

1937年12月、日中戦争開始後にだされた『神戸市史第二輯』で、勝田銀次郎市長は、このような古くて新しい都市神戸のあり方について次のように述べた。

> 我神戸市は、其境域を東西に拡張して、広優に二倍を超え、其港湾は第一期事業を完成し、第二期修築亦既に大半を竣功したり。斯くの如くして、我市の貿易は躍進振張極りなからんとし、其の価額正に本邦の首位に上り、従つて市の商工業は愈々其機構を拡大整備し、教育の実績更に益々発揚せられ、神戸市の恢弘せる規模、充実せる内容共に大戦前の比にあらず。而も加ふるに大楠公六百年祭を迎へて市民の精神作興大に見るべきものあり、茲に於てかかる異常なる発展更張は之を録して当来の参照に供するの要あるを認め（中略）顧るに神戸市の発展は我邦の進運と相伴へるは固より言を俟たざれども、其功先覚市民の不撓なる努力にも帰すべきものにして、昭和八年以来「神戸みなとの祭」を執行せるが如き、亦報本反始の精神に出でたるに外ならず

不断に自己革新していく古い歴史を持つ日本のあり方が具体化する場として神戸を考え、そのようなものとして歴史を顕彰し、市民の自治への参加を拡大していくという歴史観が第二次大戦以前は支配的だったのである。

(4) 敗戦後、モダンな都市「神戸」という認識の成立

このような戦前の歴史観は戦後には引き継がれなかった。それにはおおよそ4つの要因があると考えられる。

第1に、すでに述べたように、第二次世界大戦以前には、国史と地域の歴史は一体のものとして考えられており、皇国史観が戦後、実証的にも社会的にも展開できなくなった時、それによらない地域独自の歴史文化をあらためて語ることが困難であったことである。

第2は、空襲によって、歴史的景観および歴史文化を担う人的な結合が破壊され、そのあとに都市の復興が進んだことである。高度経済成長期、近世以来の歴史的景観を残していた都市では、その景観を残すか否かが大きな都市運営上の問題となった。神戸市の場合、空襲による中心市街の焼失によって、賛否は別としてそのこと自身が市民にとって問題となることがなかったからである。

第3には、これと関連するが、市街の焼失は、同時に都市の文化を育んできた人々の結合も破壊するものであった。それ以前とは断絶した形で戦災からの復興が神戸の歴史として語られることとなったのである。この復興および、高度経済成長による都市展開のなかで、新たな都市イメージとして「モダンな都市」神戸が強調されていく過程については、第1節でのべた通りである。

第4は、第二次世界大戦後の自治体の財政力強化のための大規模な町村合併であった。とくに神戸市は、国際的な港湾都市として機能を充実させるための後背地が必要とされ、市域は大きく拡張した。そこで拡張した個別地域の歴史性の強調は、むしろ合併の阻害要因となった。たとえば神戸市と明石市の合併は、独自の城下町以来の伝統を強調する住民運動の展開のもと、明石市の住民投票で否決されることとなったのである。したがって、戦後の神戸は多様な地域を抱えながら、それを市域の歴史的特質として十分組み入れることができなかったのである。

おわりに

歴史資料ネットワークが阪神淡路大震災被災地でぶつかった歴史意識のあり方と、その歴史的な形成過程は、港湾都市神戸の特質を色濃く持つものである。しかしながら、第二次世界大戦以前に国家の歴史的展開を具現化する場としての地域の歴史が評価されたこと、高度経済成長以降は、地域の歴史をある時代や出来事に特化させ、個々の市民もその担い手である重層的な地域社会の歴史を全体的につかむことを難しくさせているという点は、日本社会において共通するのではないだろうか。歴史資料ネットワークの活動が展開しえたということは、そのような把握を超え、地域社会の歴史を豊かに認識していこうとする新たな市民社会の形成が日本の中ではじまっていることを示す一つの事例ではないかと考える次第である。

（神戸大学文学部　日本史学専攻）

参考文献

- 歴史資料ネットワーク編 1999 『歴史のなかの神戸と平家』神戸新聞総合出版センター.
- 奥村弘 1997 「史料保全活動から見た現代都市社会の歴史意識と歴史学の課題」日本史研究会『日本史研究』416.
- 奥村弘 1997 「「モダンな都市神戸」という虚構を超えて」神戸大学震災研究会編『阪神大震災研究3 神戸の復興を求めて』.
- 奥村弘 2000 「時代が求める歴史研究のあり方とは－史料ネットの活動から考える－」歴史学研究会『歴史学研究』738.
- 奥村弘 2004 「阪神淡路大震災と歴史学－歴史資料ネットワークの活動から－」関東大震災80周年記念行事実行委員会編『世界史としての関東大震災』日本経済評論社.
- 奥村弘 2005 「大規模自然災害と地域歴史遺産保全」歴史科学協議会『歴史評論』666号.